

英語または韓国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程 —母語使用の観点から—

石毛順子

要旨

本研究は、英語または韓国語を母語とする初級日本語学習者が、日本語の作文過程においてどのように母語を使用しているのか明らかにすることを目的とする。発話思考法を用いて学習者の作文過程の思考を記録し、分析したところ、初級においては韓国語母語話者が母語をより使っているということが明らかになった。その理由として韓国語母語話者は「母語による読み返し」「母語から日本語への翻訳」という行動を多く行っているからということが示されたが、韓国語と日本語の語順が近いために、これらのような行動で母語と日本語とのスイッチが行いやすいのではないかと思われる。また、日本語の作文を書くとき、初級の英語母語話者は文法を意識化しながら書いていることが示されたため、英語母語話者には韓国語母語話者とは異なったサポートが必要であろう。

キーワード

作文過程、発話思考法、英語母語話者、韓国語母語話者

1. 本研究の位置づけと目的

話すことは、表現したいことを伝える相手が目の前におり、それを即時に表すように相手から求められることが多い活動であるが、書くことは、表現したいことを伝える相手が目の前におらず、それを読み手に示すまでに準備、編集、推敲をする時間を持つことが多い活動であると思われる。作文産出過程のモデルとしてしばしば示される Hayes and Flower (1980) のモデルは、作文過程は既有知識の検索、構想、モニタリングや読み返し、評価修正などが絶えず起こることを示している。つまり、作文のプロセスは非単線的な過程である (内田 1999)。

日本語学習者の作文過程を対象とした研究は大竹・園田・広江 (1993)、石橋 (2002)、石毛 (2008;2010a;2010b) があげられる。大竹ら (1993)、石橋 (2002)、石毛 (2008;2010a;2010b) は作文過程の学習者の思考を知る方法として発話思考法を用いているが、発話思考法とは自分の思考の道具としての、心の中の言葉である内言 (ヴィゴツキー、2001) を口に出して音声化する方法である。

大竹ら (1993) は、英語母語話者である中級・上級の日本語学習者の作文過程について調査し、学習者が母語を使うことにより認知負荷の軽減が可能な場合は母語を用いること、また日本語能力の低い学習者ほど認知負荷の軽減のために試演を行うということを述べた。石橋 (2002) は中国語母語話者である中級・上級の日本語学習者の作文過程について調査した。その結果、上級においてメタ言語的発話と課題の読み返しがよく見られ、中級において辞書などを読むことが多く見られた。石毛 (2008) は韓国語を母語とする日本語学習

者の作文過程を明らかにした。日本語のレベルの観点から見ると、初級では母語使用、中級では「作文がうまく書けない」というような負の自己評価、上級では辞書使用が多く見られた。作文のレベルの観点から見ると、内容に関する評点が中程度の人も母語を使っていることや、作文のレベルの高い人が辞書や下書きを使用し、また編集や読み返しを行っていることが明らかになった。

しかし、石毛（2008）においては学習者が作文過程で母語を使用していることは明らかとなったが、どのように母語を使用しているのかということについては述べられていない。また、参加者の母語は韓国語のみであり、人数も全体で6名と少なかった。したがって、結果を一般化するにはもっと多様な母語の学習者を参加者とし、また参加人数を増やす必要があると思われた。そのため、2009年度より参加者の母語を英語・中国語・韓国語、人数を約50名とした科学研究費若手研究（B）「第二言語作文のプロセスモデルの構築」（研究課題番号21720189）に着手し、石毛（2008）の結果を一般化することに取り組んでいる。「第二言語作文のプロセスモデルの構築」では、学習者の日本語作文プロセスを明らかにし、学習者がどのような点でつまづいているのか、また何を有効に用いているのかを明らかにし、将来の指導に役立てたいと考えている。その一部である石毛（2010a）では中国語を母語とする上級日本語学習者と、英語を母語とする中級日本語学習者を対象にパイロット調査を行い、作文過程の行動を分類するカテゴリーに母語使用の視点を取り入れることの必要性を提言した。石毛（2010b）ではその結果をふまえ、英語母語話者の作文過程における、母語を用いた思考行動を分類するカテゴリーを提案した。本研究は、初級の英語母語話者・韓国語母語話者を取り上げ、日本語の作文過程でどのように母語が使われているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1 参加者

英語を母語とする初級日本語学習者5名と、韓国語を母語とする初級日本語学習者3名であった。分析対象としたのは、英語を母語とする初級日本語学習者4名と、韓国語を母語とする初級日本語学習者3名であった。

2. 2 調査期間、実施場所

2009年11月、2010年6月、11月、調査者の研究室で調査は行われた。

2. 3 作文のテーマ

参加者は、「自国の食べ物⁽¹⁾と日本の食べ物」「自国の家と日本の家」「男と女」、「映画とビデオ」、「田舎の生活と都会の生活」「車と自転車」「高校生活と大学生活」という7つの比較のテーマの中から1つを自由に選択して作文を行うことが求められた。テーマの提示が多いのは、テーマによる書きにくさをできるだけ排除し、参加者が持つ作文の能力を最大限発揮できるようにするためであった。「自国の食べ物と日本の食べ物」「自国の家と日本の家」「男と女」は石橋（2002）、「映画とビデオ」、「田舎の生活と都会の生活」「車と自転車」「高校生活と大学生活」は同様に第二言語習得における作文の発達を扱った Kobayashi & Rinnert（1992）で用いられたテーマであった。

2. 4 手続き

まず、作文時にどんなことを考え、どのようにふるまうのかを知るために調査を行っているということを説明し、そのため、作文を行う時に考えていることを日本語でも母語でもよいので、できる限り話すよう依頼した。それから、発話思考法の練習を行った。練習で用いられたものは、四則計算、母語での作文、日本語の作文であった。

約 1 時間の練習後、実験を行った。実験はビデオで撮影され、IC レコーダーで録音された。まず作文用紙が渡され、テーマが提示された。辞書や携帯の変換機能の使用など、作文に参加者が必要とするものは全て許可されていた。実験に入る際に、参加者が沈黙してしまった際は、話すようにカードで指示するという教示がなされた。このような手続きを経たものの、英語母語話者のうち 1 名が作文の途中から発話思考法を行うことができなくなったため、分析対象外とした。

2. 5 分析方法

分析はタイムサンプリング法⁽²⁾で、チェックリストによるチェックを行った。その際、補助資料として発話プロトコル、参加者の書いた作文とメモを用いた。発話プロトコルの母語部分は、参加者本人または協力者⁽³⁾が文字起こし、翻訳を行った。チェックリストにおける作文過程の行動機能のカテゴリーは、石毛(2010b)の母語を用いた行動のカテゴリーの中から、頻度の高かった「母語で作文の進め方に対して言及する」、「日本語で書いた文を母語で読み返す」、「母語から日本語へ翻訳する」、「母語で言語形式に対して言及する」を用いた。

3. 結果と考察

本研究の目的は、初級の英語母語話者・韓国語母語話者の日本語での作文過程における、母語使用の実態を明らかにすることであった。

3. 1 初級英語母語話者と韓国語母語話者の母語使用率の違い

学習者の母語(英語・韓国語)と母語使用の傾向を検討するために、母語使用の度数分布について 2(学習者の母語)×2(母語使用の有無)の χ^2 検定を行ったところ、母語使用の分布に有意な偏りの傾向が認められ($\chi^2(1, N=143) = 2.765, p < .1$)、残差分析の結果、初級において韓国語母語話者は母語をよく使っていることが明らかとなった(表 1)。

表 1 母語別 母語使用度数と残差

		母語		合計
		あり	なし	
英語	度数	73	19	92
	残差	-3.6	3.6	
韓国語	度数	46	5	51
	残差	3.6	-3.6	
合計		119	24	143

3. 2 初級英語母語話者と韓国語母語話者の母語の使用状況

3.1 では韓国語母語話者が母語をよく使っていることが明らかとなったが、さらにどのように英語母語話者・韓国語母語話者が母語を使っているのかについても検討する。学習者の母語（英語・韓国語）と行動の関係を検討するために、行動の度数分布について 2（学習者の母語）×4（行動カテゴリー）の χ^2 検定を行ったところ、行動の分布に有意な偏りが認められ（ χ^2 (3, N=178) = 12.057, $p < .01$ ）、残差分析の結果、初級において韓国語母語話者が「母語による読み返し」、「母語から日本語への翻訳」をよく行っており、英語母語話者が「母語での言語形式に対する言及」をよく行っていた（表 2）。

表 2 母語別 行動カテゴリーの度数と残差

		行動カテゴリー				合計
		進め方	読み返し	翻訳	言語形式	
英語	度数	29	8	49	29	115
	残差	1.2	-3.0	-5.9	7.7	
韓国語	度数	14	9	36	4	63
	残差	-1.2	3.0	5.9	-7.7	
合計		43	17	85	33	178

3. 2. 1 「母語で作文の進め方に対して言及する」の具体例

残差分析では有意ではなかったが、「母語で作文の進め方に対して言及する」というカテゴリーに分類される具体例を見ておく。「作文の進め方」のように一つにまとめたが、以下の3つのパターン「テーマを選ぶ」「構成を考える」「内容を考える」という行動が見られた。

<テーマを選ぶ>

例 1) 힘 주제를 뭘 정하지? (ふむ、テーマを何に決めようか)

<構成を考える>

例 2) 冬に、イギリス人は、サラダ、と、アイスや、食べな、食べ、食べ、食べた、くないと、思、思い、ます。じゃあ、conclusion. Hm, うん、多分、イギリス人は、もっと、もっと、日本の、

例 3) 무슨 결론인지 모르겠지만 아무튼 난 이런 결론으로 끝을 내겠어. (何の結論かわからないけど、とにかく僕はこんな結論で終わりにするよ)

<内容を考える>

例 4) 日本の家、what's my home like, 私の、私の、うん、日本、の、家、は、ちょっと、つ、つまらない、

例 5) 정말 밀도 끝도 없는 주제죠. 정말 음. 일관성도 없고 지향점도 없는 그런 글. . 음. 에헤이 음 그래서, 음, 카야 정말 밀도 끝도 없다. (本当にわけのわからない話で

すね。マジで、うん、一貫性もなく趣旨もないそんな文章。うーん、えい、うん、だから、うん、げえ、わけがわからない、マジ。

例 6) (下書きをしながら) all girl students, umm, hmm, yeah less free time, um, have, teachers? no, oh less freedom, I don't know if that works. less freedom

例 7) (下書きをしながら) 시골 서울에서 계속 살았다, 시골 공기가 좋고 자연 산 좋다 (田舎 ソウルですずっと住んだ、田舎 空気がよく、自然 山 いい)

以上のような具体例が見られた「母語で作文の進め方に対して言及する」は、英語母語話者と韓国語母語話者の頻度に有意な差は見られなかった。したがって、このような作文の進め方に対するメタ的な言及は、初級学習者においては母語と日本語との類似性に関わらず行われているということが示唆された。

3. 2. 2 「日本語で書いた文を母語で読み返す」の具体例

残差分析を行ったところ、初級においては有意に「日本語で書いた文を母語で読み返す」ということを韓国語母語話者が多く行っていることが明らかとなった。具体例を見て、検討していく。

まず、韓国語での読み返しを見てみる。

例 8) (「たくさんある」と書いた後で) 많이 (たくさん) 있는 (ある) 것을 (ことを) 보고 (見て),

例 9) (「はなしがじょじゅうです。男がうらやましいです」と書いた後で) 말을 (話を) 잘 (上手に) 해서 (して) 부러워 하지. (うらやましがるだろう)

韓国語と日本語は文法がよく似ており、語順も同じである(家村 1994)ため、このように書かれている日本語にそのまま韓国語をあてはめて読んでいけばよく、母語を使用することに困難を伴わない。したがって、文の確認に有効に読み返しを用いることができるため、母語での読み返しが多いと思われる。

次に、英語での読み返しを見てみる。日本語と英語では語順が異なるためか、韓国語よりは少なかったが、母語での読み返しは行われていた。

例 10) (「食堂に食べに行かなくてははいけません」と書いた後で) Must go to the cafeteria if you want to eat,

例 11) (「イギリス人はがい国の料理が好きいです」と書いた後で) English people like various cooking,

例 12) (「かおり(仮名) といって、しんせつで楽しいです」と書いた後で) Her name is kaori(仮名), she, she is nice and funそして、what else about my room, oh!このアパート。ト、が、は、トは、台ところ、ところ、と、トイレット、レットがあります。

しかし、例 11) に見られるように、書かれた「がい国の料理」を“various cooking”と読んだり、あるいは例 10) にあるように書かれていない“if you want to eat”を付け足して読むなど、必ずしも同じように読んでいとはかぎらない。それは例 9) の「はなしがじょじゅうです。」を“말을 (話を) 잘 (上手に) 해서 (して)”と読んだ韓国語でも同様である。さらに、例 12) を見てみると、読み終えた後に次の内容を what else about my room と

いうように考えている。したがって、読み返して文を確認する際は、文法や語彙だけではなく、内容の確認も行われており、文の内容を再度理解することによって、次の文を書くきっかけにしているとも思われる。

3. 2. 3 「母語から日本語へ翻訳する」の具体例

残差分析を行ったところ、初級においては有意に「母語から日本語へ翻訳する」ということを韓国語母語話者が多く行っていることが明らかとなった。具体例を見て、検討していく。

まず、英語からの翻訳を見てみる。

例 13) often, (教科書を見て)よく、

例 14) 起きまし、oh yeah, had to, oh…起き、um…起きなくて、ah, I just thought of this…起きなくて、(中略)起きなくて、は、いきませんでした、いけ、いけ、ませんでした。

例 15) Because I have a big closet I can have a lot of clothes, closet, closet, closet! 戸棚、そして、大きい、戸、棚、が、あるから、から、たくさん服、服、が、あれ、あります。あら、あります。

英語から日本語への翻訳は、例 13) のようなものも見られたが、むしろ単なる単語の置き換えではなく、例 14) のように 2 語以上の句を置き換えたり、例 15) のように 1 文丸々母語で考えてから日本語に直すことがよく見られた。次に、韓国語からの翻訳を見てみる。

例 16) 하지만 (しかし) しかし、しかし、田舎、田舎より、く、空気、空気、とか、自然、自然の、(辞書をひく) 환경 (環境)、環境

例 17) 差異点、差異点は、음 (うん) (辞書をひく) 맛 (味) 맛 (味) 味、の素、味、

例 18) 味を、을 (を) 좋아한다고 (好むと) 생각합니다 (思います) を、を、を、好き、好き、好き、だと思えます。

韓国語から日本語への翻訳は、例 18) のように句や文を日本語に翻訳することも見られたが、例 16) や例 17) のように日本語の文の中の一部を韓国語にし、それを辞書を用いて日本語に置き換えることがよく見られた。3.2.2 で述べた「母語での読み返し」と同様に、韓国語と日本語は語順が似ており、両者をスイッチすることが思考の妨げになることが少ないため、初級においては韓国語母語話者は日本語と母語をスイッチしやすいと考えられる。

3. 2. 4 「母語で言語形式に対して言及する」の具体例

残差分析を行ったところ、初級においては有意に「母語で言語形式に対して言及する」ということを英語母語話者が多く行っていることが明らかとなった。「言語形式に対する言及」のように一つにまとめたが、以下の 2 つの行動パターン「語彙と表記に対する言及」「文法に対する言及」が見られた。具体例を見て、検討していく。

<語彙と表記に対する言及>

例 19) 島、し、so it looks like a bird on a mountain,島、

例 20) Fish and potato, po, oh I hate, Would it be in ひらがな or カタカナ? ポテト、ポテト、ポテト、Hm, well,カタカナ maybe ポ、oh but I don't like カタカナ、

例 21) かわいい、어떻게 쓰나 (どう書くんだっけ)。

例 22) 男より 음 예쁘지 아름답지 (うん、かわいい、きれい)。きれい、きれい、かっこう、각코이는 남자한테 쓰는 거지 (かっこいいは男に使う)

例 19-21 は表記に対する言及であり、漢字の書き方に代表されるようなものである。例 22 は語彙の使い分けに対する言及である。このように、語彙と表記に対する言及は英語母語話者、韓国語母語話者ともに行われていた。

<文法に対する言及>

例 23) イギリス、日本のお菓子、と、寿司、や、うん、I don't need 「と」 there, I should have 「や」、寿司を食、べら、れます。

例 24) たくさん友達、はい、たくさんたくさんたくさん isn't that an adjective? that's what I learned、たくさん友達、いろいろ、Yeah!いろいろ、いろいろ、uh 友達、がいます。

文法に対する言及は、英語母語話者のみが行っていた。この行動カテゴリーが英語母語話者のみに見られたのは、上述のように韓国語と日本語には文法に類似性がある（家村 1994）ため、韓国語母語話者は文法を意識化しなくてもよいが、英語母語話者の場合は文法で意識化して書く必要があるからであると思われる。

4. 本研究のまとめと課題

以上のように初級においては韓国語母語話者が母語をより使うということが明らかになり、その理由として韓国語と日本語の語順が近いため、「母語による読み返し」「母語から日本語への翻訳」のような行動で母語と日本語とのスイッチが行いやすいということが示唆された。また、日本語の作文を書くとき、初級の英語母語話者は文法を意識化しながら書いていることが示され、韓国語母語話者とは異なったサポートが必要であることが示唆された。

このような示唆が得られたが、本研究は科学研究費若手研究（B）「第二言語作文のプロセスモデルの構築」（研究課題番号 21720189）の一部であり、全体像はまだ見えていない。初級において、日本語と語順の類似した韓国語を母語とする学習者と類似しない英語を母語とする学習者の比較を行ったが、さらに語順の類似しない中国語を加えた検討をすることにより、「母語での読み返し」の機能が明らかになるとと思われる。

また、本研究では一つの行動を捉えてカテゴリーわけをしたが、読み返しの後に何が行われたのか、あるいは作文の進め方に言及した後どのような文が書かれたのかなど、行動がどのようにつながっているのかも分析対象となるであろう。

(石毛順子 いしげじゅんこ・国際教養大学・ishige@aiu.ac.jp)

注

1. 提示する際は、参加者の出身国を示した。
2. タイムサンプリング法は、行動を任意の時間単位で区切り、観察対象となる行動の有無を記録する方法である。本研究は時間単位を1分とした。
3. 英語母語話者1名、韓国語母語話者1名に協力を依頼した。

付記

本研究は科学研究費若手研究（B）「第二言語作文のプロセスモデルの構築」（研究課題番号21720189）の助成を受けたものである。

参考文献

- 家村睦夫(1994)「言語の系統」田中春美・樋口時弘・家村睦夫・五十嵐康男・下宮忠雄・田中幸子『入門ことばの科学』第11章 大修館書店
- 石毛順子(2008)「第二言語習得における作文教育の意義と特殊性」2007年度東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程論文
- 石毛順子(2010a)「『第二言語作文のプロセスモデルの構築』パイロット調査報告」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第2号 pp.84-89.
- 石毛順子(2010b)「母語使用の観点から見た英語母語話者の日本語作文過程」日本教育心理学会第52回総会論文集 p506
- 石橋玲子(2002)『第2言語習得における第1言語の関与』風間書房
- 内田伸子(1999)『発達心理学』岩波書店
- 大竹弘子・園田愛・広江浩一(1993)「THINK-ALOUD プロトコルを用いた日本語学習者の作文過程及びストラテジーの分析」『1993年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.105-110.
- Hayes, J. & Flower, L. (1980) Identifying the organization of writing processes. In Gregg, L. & Steinberg, E. (Eds.), *Cognitive processes in writing*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- KOBAYASHI, H. & RINNERT, C. (1992) Effects of first Language on second language writing: Translation versus Direct Composition. *Language Learning* 42, pp.183-215.